

2024年8月10日(土)第3回「松山市城山斜面崩壊・緑町土砂災害」調査速報会

文献・絵画史料に見る

松山市城山斜面崩壊地周辺

大本敬久 愛媛大学地域協働推進機構 特定准教授

胡 光 愛媛大学法文学部 教授

7月28日の第2回速報会での中間報告

○城山の北側での土砂災害史料は、1860年の三輪田米山日記に見られるものの、史料的には少ない。

○松山城の築城にあたっては、複数の山を削平して本丸・本壇部分が築かれた説は、江戸時代後期成立の史料に見られる。

○本壇部分は、400年以上前の加藤嘉明の築城当初のものではなく、1642(寛永19)年に松平定行により大幅に改修されている。

○松山藩主歴代の記録である「垂憲録拾遺」(1835年頃成立)には、本丸・本壇部分は地盤が不安定であるとする伝承記述が見られる。実際、昭和10年代の修理記録には地盤沈下等の記述が確認できる。

○江戸時代末期から昭和初期の絵図・地図から、今回の斜面崩壊地周辺に池が存在していたことが確認できるが、位置の特定は今後の課題。

松山市内の文化財（史跡等）での土砂災害

1860年 松山城（北側）・繁多寺（国指定史跡「伊予遍路道」）

三輪田米山「諸用日記（二）」（愛媛大学図書館蔵）

万延元（1860）年4月8日（新暦で5月28日）

「当日、大水、畑寺繁多寺ノ上ノ山崩、歡喜天及寺坊へ、土石入、御城内ノ北石垣、側山も崩」

1677年 石手寺（本堂・国指定重要文化財）

宮脇通赫『伊予温故録』向陽社、1884年、99頁

「延宝五（1677）年早魃、住持雲龍をして雨を祈らしむ、効験あり、六月淋雨、北の山岸潰崩して伽藍を埋む、久松家、佐久間儀左エ門をして更にこれを営ましむ」

西園寺源透『松山史要』伊予史談会、1927年、33頁

「松山世話に云ふ、延宝五（1677）年大雨の為、土砂崩れ、石手寺本堂を破る、依て再建すと、蓋し修復ならん」

江戸時代末期(1864年)に描かれた松山城

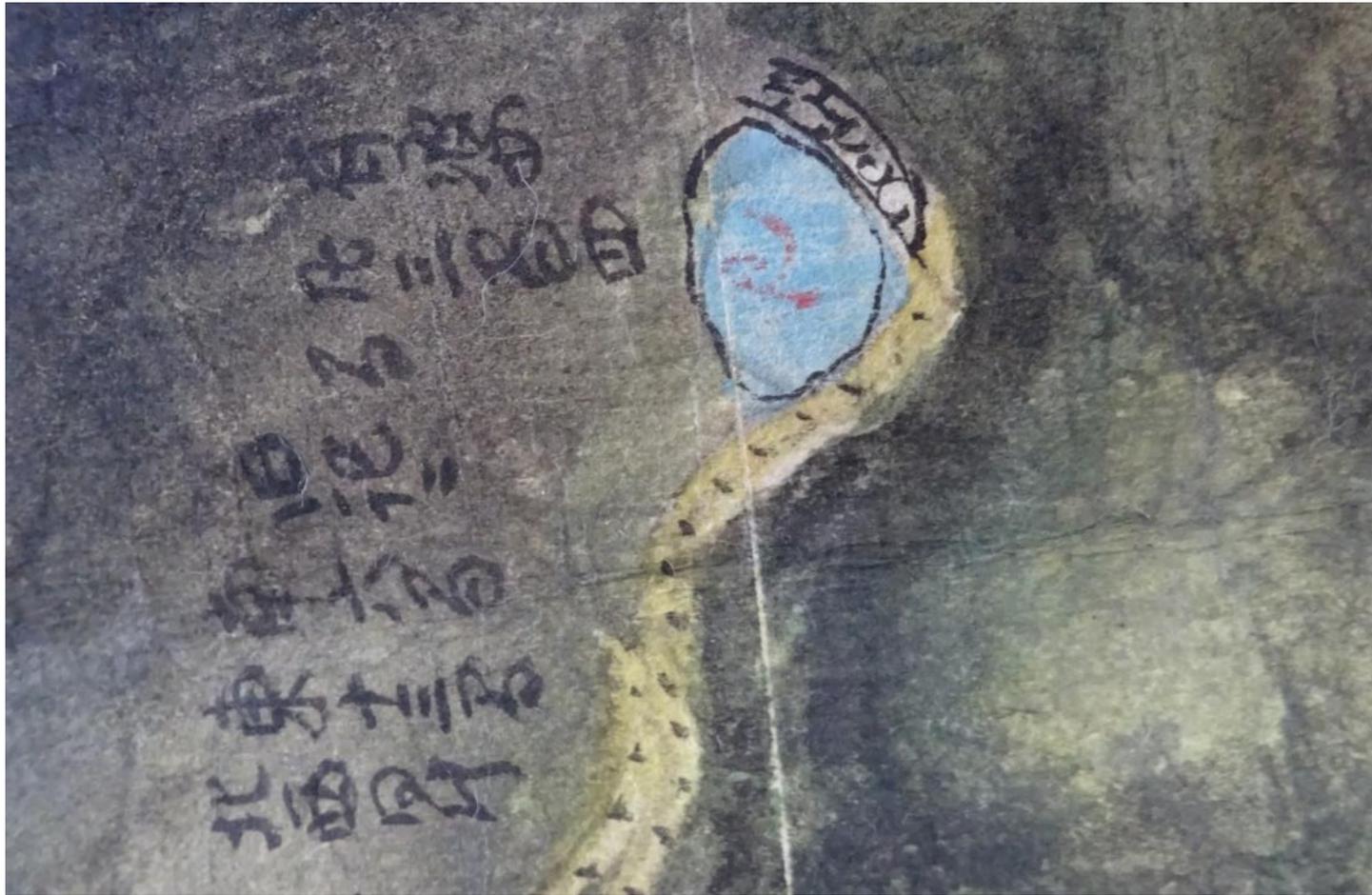


亀郭城秘図(部分) 1864(文久4)年 伊予史談会蔵

○絵図の寸法は、縦94cm、横124cm。作者は野沢隼太(松山藩士・軍学者野沢弘道の養嗣子)

○加藤嘉明の築城の構想を隼太が解釈して復元した絵図。実在しない曲輪も描かれている。

江戸時代末期(1864年)に描かれた松山城



亀郭城秘図(部分) 1864(文久4)年 伊予史談会蔵

○本絵図の注記「有姿、凡三間四間(6~8m幅)、旧記二南六間東十三間、北西同断」

○長者が平から降りる道が描かれる。池の下流部に石垣が描かれている。

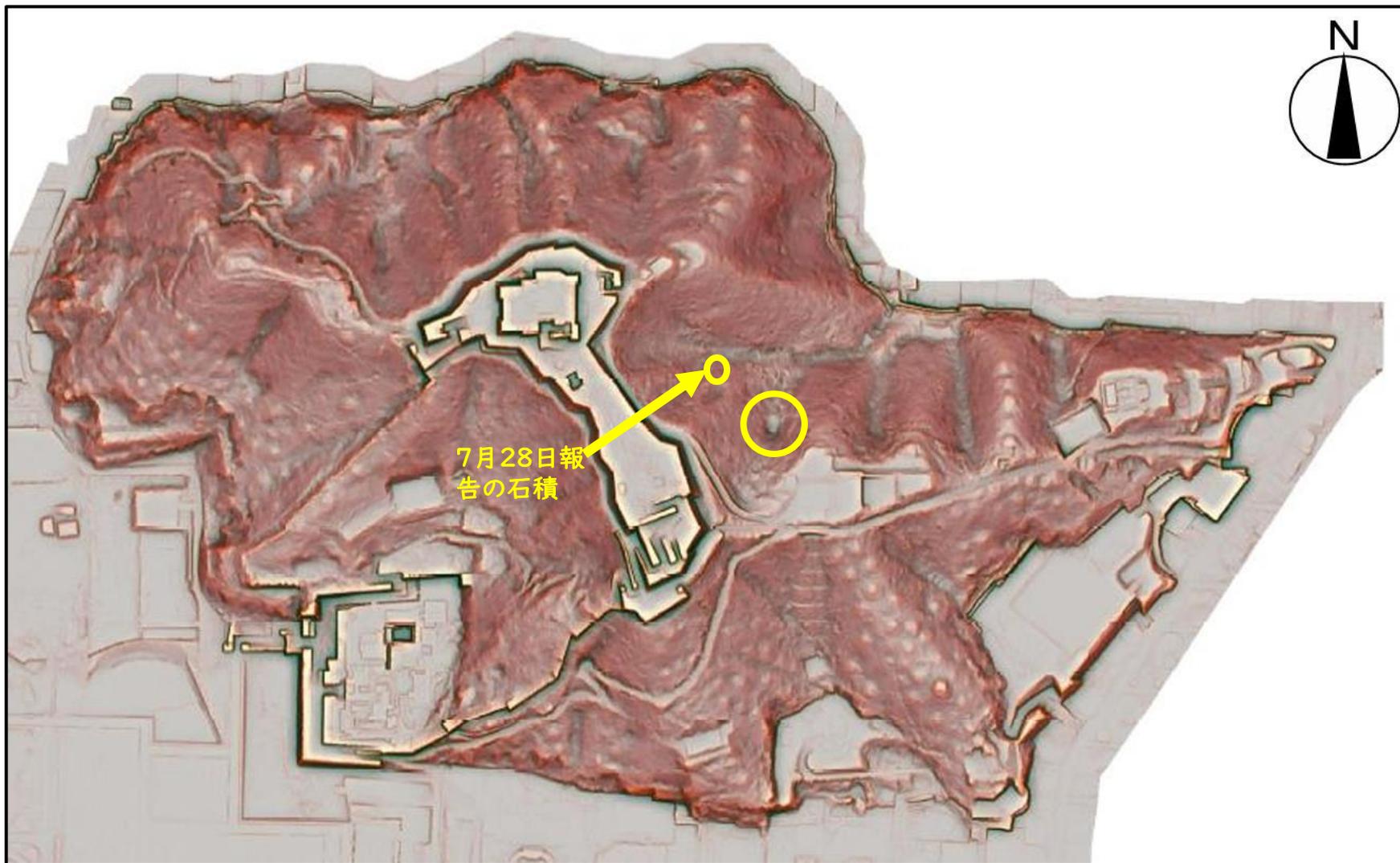
「松山城警備之事」（伊予史談会文庫「野沢家文書雜集」所収）

「良御門外ハメ谷中程ニ溜池御座候而、
只今之有姿凡四間ニ三間程ニ相見
水溜宜敷候間」

○『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』24号（2019年）にて翻刻

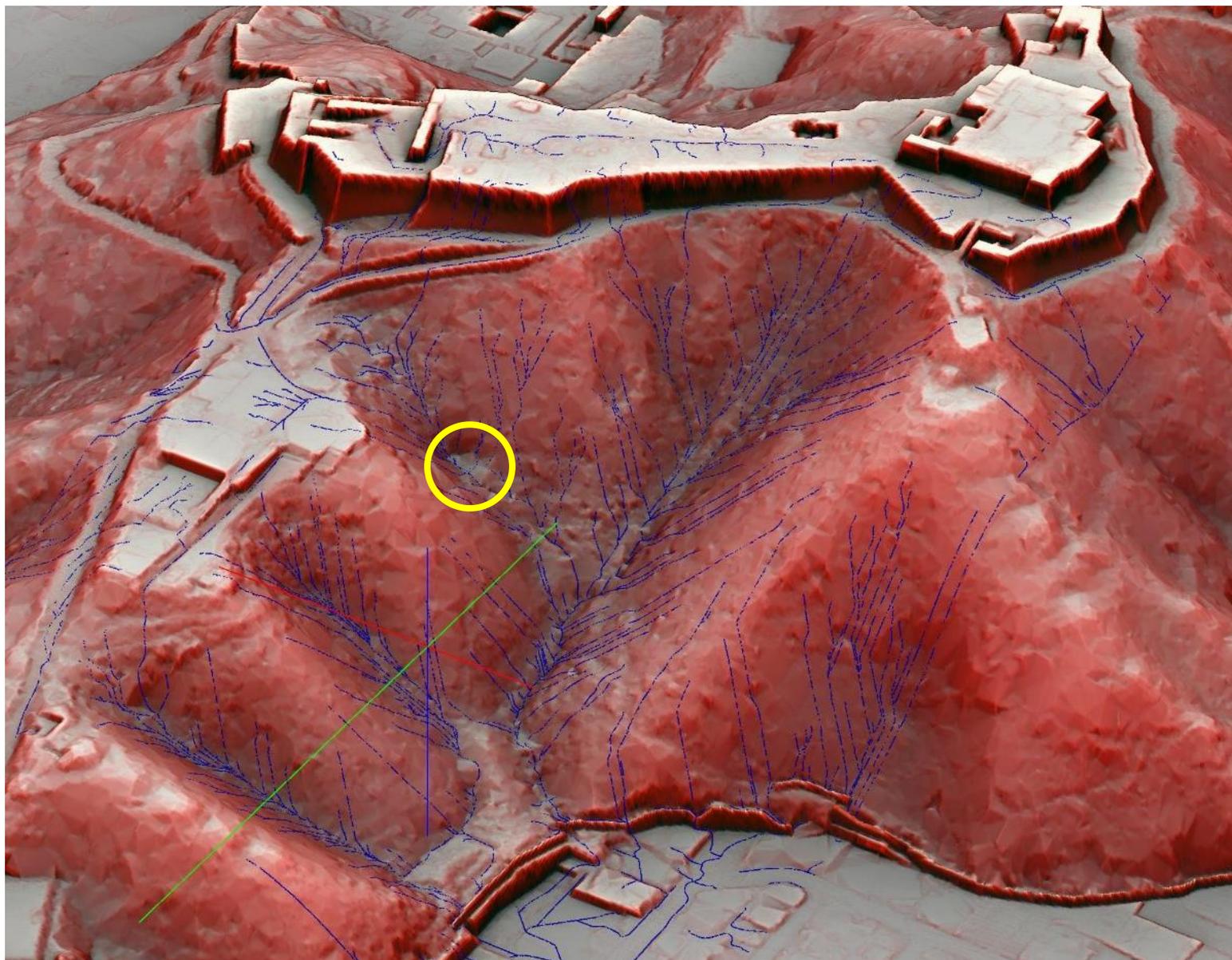
○「亀郭城秘図」と同じく「野沢隼太」によるもの。

○「水溜宜敷」＝池の設置目的は、治水よりも、利水目的か。



松山城の赤色立体図

松山市『史跡松山城跡樹木管理計画』2023年、71頁より転載



赤色立体図 松山城崩落斜面水系トレース



2024年8月5日摄影



2024年8月5日撮影



2024年8月5日撮影

- 人工の池。集水地形になっており下流に水と土砂が流れた形跡。
- 斜面崩壊地の南側の谷の中腹。「長者が平」から降りていく場所。
- 最大幅8.2m 奥行12.8m 花崗岩
- 土壌は砂岩。水を含んで湿った状態。
- 「亀郭城秘図」のとおり、下流部を石垣で囲っている。



2024年8月5日撮影

「首洗いの池」に関する伝承

鶴村松一『伊予路の松山城物語 -375年の歴史と文学-』1977年、35頁

- 首洗いの池跡 長者が平北谷
- 周囲を石垣で築き水が少し溜まっている。
- 昔戦いに敗れたある国の勇士を捕らえたが殺すのが惜しく家臣になるよう説得したが承知せず、この池で打首にした。



鶴村松一『伊予路の松山城物語』より転載

2024年8月5日撮影

大杉神社 松山市緑町1丁目3
(市役所緑町詰所の西隣)

祭神 大杉大神・白龍王大神
稲荷大明神

由来 首洗いの池の白蛇を白龍と
して祀ったのが起源



地理院地図より作成

蛇・龍伝承—大杉神社と首洗い池—

清水の里研究会編『清水の里』松山市立清水小学校、1988年、163～4頁

- 大杉さんの御神体は三つ祀っている。
- 加藤嘉明の時代に城主のお叱りを受けた儒者が長者が平で割腹した。その儒者の首を城山の谷にある池で洗った。儒者は神社の少し上に埋め、そこに杉を植えた。御神体の一つはその儒者の霊である。(大杉大神)
- 首を洗った池は「首洗いの池」と言われるようになり、その池に白蛇が住むようになった。白蛇は儒者の霊の生まれ変わりだと言われていた。その白蛇を「白龍大明神」として祀っている。
- 三つ目の「稻荷大明神」は田畑でけがなどの不都合がおこる、稻荷が埋まっていた。それを大杉のもとに持ってきた。
- 儒者を葬ったもとに植えた杉は大杉になり、「杉谷町」の地名の由来となった。大杉は戦時中に伐採された。
- 現在、緑町一丁目の婦人会、老人クラブ、公民館で奉賛会を構成し、毎年5月5日に祭りを行っている。

※松山百店会『松山百点』289号、2013年3月、39頁にも大杉神社が紹介されている。

地名の変遷 杉谷町から緑町へ

杉谷町(すぎたにまち)

- 城山の麓にある杉谷に接するためにこの町名が生まれた。
- 「津田家記」(松山叢書談所収)に享保元(1716)年「松山城下杉谷より出火」とあり、江戸時代からこの地名があった。
- 明治22(1889)年より松山市の町名。
- 昭和39(1964)年に、町名は「緑町」となり、「杉谷町」の町名は消える。

参考文献 『日本歴史地名大系 愛媛県の地名』平凡社、1980年、角川日本地名大辞典『愛媛県』1981年

城山と「杉」 「松山御城下絵図」(伊予史談会蔵)

- 延宝5(1677)年作成・文政11(1828)年加筆
- 萬翠荘の北側周辺、城山の北東に針葉樹(杉と推定)が描かれている。